

(共同討議) / カントとケーニヒスベルク大学

カントとケーニヒスベルクのアリストテレス主義

——宗教改革以降のアリストテレス主義の消息——¹

佐藤 恒徳

はじめに

本稿の目的は、ケーニヒスベルク大学に関連して、アリストテレス主義と総称される諸思想のどこか一点に的を絞り、深くメスを入れることではない。むしろ、アリストテレス主義という思想伝統について、Paul Oskar Kristeller や Charles B. Schmitt の著作を通して比較的知られているルネサンス期よりも後、宗教改革期からの消息を大まかにつかみ、ケーニヒスベルク大学とつなぐことである。

アリストテレス主義に関する文献は国内ではまだ少ないが、海外の研究は意外に数が多く、特に近年は増加傾向にある。Schmitt が1971年に「ドイツは Petersen [1921年] と Wundt [1939年] の初期の著作で既に十分によく調べられているが、それ以上の研究は最近はほとんどなされてこなかったと思われる」²と評したような状況は、おそらく変わりつつある。

本稿はまず(1)宗教改革と教育改革という基本的な背景を簡単に眺め、(2)草創期のケーニヒスベルク大学の様子をのぞいたうえで、その後のアリストテレス主義の消息を、(3)ラムス主義との関係、(4)ザバレラからの影響、(5)スアレスからの影響、(6)独自の認識論の展開という4点をめぐって辿り、最後に(7)18世紀につなぐ。

1. 宗教改革と教育改革

賢公(der Weise)ことザクセン選帝侯フリードリヒ3世は1502年、領内にヴィッテンベルク大学を創設する。1512年には神学部教授にルターが着任し、1517年に宗教改革が始まると、ルターは翌年、大学の教育改革に乗り出す。ヴィッテンベルクは選帝侯の庇護のもと、ルターの宗教改革の拠点となり、教育改革を経てプロテスタント大学に変わった大学である。

学芸学部ではアリストテレスの著作が網羅的に教えられていたが³、ルターはカリキュラムからアリストテレスを取り除こうとする。聖書読解のための語学教育が重視され、ギリシア語の教

1 本稿で引用文中の〔 〕は佐藤による原語などの補足である。繰り返し参照する文献の大部分は文献表中の略号で示す。

2 Schmitt, Charles B., *A Critical Survey and Bibliography of Studies on Renaissance Aristotelianism, 1958-1969*, Padova, 1971, p.98.

3 菱刈晃生『メランヒトンの人間学と教育思想——研究と翻訳——』成文堂, 2018年, pp.85-87.

授とヘブライ語の教授を新たに任命することが決まり、ギリシア語の教授にはメランヒトンが着任する。これに続いて1520年、ルターは大学の教育改革のプログラムを公表し、アリストテレス排除の姿勢を強める。アリストテレスの自然学、形而上学、靈魂論、倫理学は取り除かれねばならない。しかしルターも、論理学、修辞学、詩学を排除しようとはしていない。これらは学生の役に立つので、「別の短い形で」読むのはよい。ただし、「注釈書や学派〔secten〕は取り除かれるべきである」⁴。

ヴォルムスでの帝国議会を終えるや、ルターは選帝侯領の外れにあるヴァルトブルク城に身を隠すことになり、城内で筆をふるうルターと連携しつつメランヒトンの主導でカリキュラムの改革が行われる(1521年)。ルターが十カ月ほどでヴィッテンベルクに戻った後も、メランヒトンは(賢公を継いだ)新選帝侯ヨハンの巡察官(visitorator)の一人として、実地で、また膨大な数の書簡を通して、種々の学校の創設や改革を援助し続ける。ルターも『ドイツ全都市の市参事会員に対する勧告』(1524年)を出版して、福音主義に基づく教育の必要性を説いていく。

ザクセン選帝侯を除く諸侯のなかでは、1523年にドイツ騎士修道会の総長(ドイツ騎士団長)アルブレヒト・フォン・ブランデンブルク＝アンスバッハが真っ先にルターに従っている。アルブレヒトがいつルターを知るに至ったかは分かっていないが、ルター派の若き牧師アンドレアス・オジアンダー(後にコペルニクス『天球の回転について』の有名な匿名序文を書く人物)の説教を通して回心の体験に導かれたようである⁵。1524年にはドイツでヘッセン方伯フィリップがこれに続き、ルターをかくまう選帝侯を支持し、その後も領邦君主や自由都市が数多くプロテスタントに転じることになる。フィリップ伯は領内にマールブルク大学をつくり、これがプロテスタントの領邦に新設された最初の大学となる。プロテスタント領邦の諸大学は、テュービンゲン、ハイデルベルク、フランクフルト(オーダー)、ライプツィヒ、ロストックと、教育改革のために続々とメランヒトンに助力を求めてくる⁶。新設されたマールブルク(1527年)、ケーニヒスベルク(1544年)、イエーナ(1558年)でも事情は同様である。ルターの仲間たちはこの求めに応じて、牧師として、人文主義者として、ドイツ各地の都市に教会と教育の改革を広めていくことになる⁷。

2. 初期のケーニヒスベルク大学

総長アルブレヒトは、義父でもあるポーランド王(ホーエンツォレルン家)に臣従することで、修道会領(国)を世俗化してプロイセン公国にあらため、初代プロイセン公となる。牧師や役人を育てる学校をケーニヒスベルクにつくることを決め、やがてはこの学校を拡充して大学にしようともくろむ。1542年にはメランヒトンとルターにこの学校について伝え、特にメランヒトンに助力を求めている(Töppen, p.87)。メランヒトンはこの学校のために教師たちをみつুকろうほか、

4 菱刈, 上掲書, p.90.

5 Jähnig, Bernhart, *Preußenland, Kirche und Reformation: Geplantes Zusammenspiel von geistlicher Macht und weltlicher Herrschaft*, Münster, 2019, p.92f.; Arnoldt 1, pp.172-174.

6 Gerhard Arnhardt & Gerd-Bodo Reinert, *Philipp Melanchthon. Architekt des neuzeitlich-christlichen deutschen Schulsystems*, Donauwörth, 1997, p.112.

7 『石原謙著作集 第9巻 キリスト教の展開』岩波書店, 1979年, pp.354-356.

その学長として最終的に甥サビーヌスをケーニヒスベルクに送っている。この学校に多くの学生が集まり、その上級クラスを組織し直して(Töppen, p.105)、アルブレヒトのもくろみどおり1544年に創設されたのがケーニヒスベルク大学であり、プロテスタントの領邦に新設された二番目の大学である。

ケーニヒスベルクに送られたこのサビーヌス(ザビーネ, 1508-1560年)が、ケーニヒスベルク大学の初代学長となる。サビーヌスは若い頃、ヴィッテンベルクでメランヒトンに才能をみとめられた詩人である。メランヒトンの愛娘と結婚し、フランクフルト大学で詩学と雄弁術を教えていたが、みずからケーニヒスベルク行きを買って出る(Töppen, p.110)。アルブレヒトに仕え、新しい学校の学長を務め、ケーニヒスベルク大学ができると、初代学長に指名される。大学創設の宣言はプロイセン外にも広く布告され(Töppen, p.108f.)、ダンツィヒやエルビング、近郊の町からやってきた学生のほかに、ポーランド人も多数、ルター派の信仰から門戸を叩き、200人ほどの学生が集まる⁸。

ケーニヒスベルク大学には最初、神学部、医学部、法学部に各1人の教授と哲学部に8人の教授、計11人の正教授(Professor ordinarius)が認められていた。しかし、5年目の1548年には既に、上級三学部のそれぞれに第二教授(これも正教授である)のポストが追加されている。1546年の学則では、次の11科目が公講義(lectio publica)科目に定められている⁹。

ヘブライ語、専任	修辞学、歴史学を兼任	弁証術(論理学)、専任
ギリシア語、倫理学を兼任	雄弁術、兼任	数学、専任
ラテン語、専任	詩学、雄弁術を兼任	自然学、専任
	歴史学、兼任	倫理学、兼任

11科目の記述にはあいまいな部分もあるが、詩学の教授は雄弁術を、ギリシア語の教授は倫理学をそれぞれ兼任し、おそらくは独立の講義を開くように定められたものと思われる。こうした講義科目は、ヴィッテンベルク大学で、教育改革が一段落した1536年に開設されていたものとよく似ており、異なるのは、ヴィッテンベルクでは雄弁術が開講されていないこと、歴史学と道徳哲学が専任の教授によって開講されていたこと、二人の数学教授がそれぞれ数学を開講していたことである。

学長サビーヌスはみずから詩学と雄弁術を教え、修辞学を専任の教授に委ねた。大学の評議会(Senat)は理論と実践が別々にならないよう、修辞学と雄弁術の統合を望んだのに対して、サビーヌスはこの二つを別の講義で扱うべきだと考えていた。修辞学と雄弁術については、マールブルクやフランクフルトでもそれぞれに専任の教授がいたという(Töppen, p.133)。結果的に、ケーニヒスベルクでは雄弁術のポストがその後も(詩学との兼任の時期がありながらも)長く、18世紀に入った頃まで存続している。

8 サビーヌスは永年学長の資格を約束されていたが、学長および教授としての務めに疲弊し、3年で音を上げている(Töppen, pp.169-171)。その後も二度、学長を務めているが、1555年にはケーニヒスベルクを去る。なお、1549年には前述のオジアンダーが神学部の第二教授に就任し、翌年出版される討論によって義認論争を巻き起こし、学内外を震撼させることになる(Töppen, pp.175-194, etc.)。

9 Arnoldt 1, Beylagen, p.126f. [Beilage N.46].

倫理学について、サビーヌスは、哲学が盛んなイタリアでは哲学教師は各大学に一人だけと決まっていると述べていたという。ケーニヒスベルク大学には自然学者、つまり自然哲学者が一人いるので、他に倫理学者(実践哲学者)は不要だという主張である(Töppen, p.134f.)。その後もしばらくはギリシア語の教授に任され、1572年には詩学の教授に任されるようになったが、大学が給与を出すことにより、この教授が1579年に実践哲学の初代教授に就任する(Arnoldt 2, p.387)。このポストはしばらく歴史学のポストを兼ねるものであったが、4代目の教授が法学部の員外教授へと転任し、そのさい歴史学の講義だけは続けて教えたことが機縁となり、1615年によく歴史学から独立したポストとなる。その意味では、実践哲学に専任の教授が生まれるのは大学創設の約70年後なのである。詩学、修辞学、雄弁術の充実ぶり比べると、実践哲学の軽視はメラニヒトンの方針からの逸脱と言えるかもしれない。

歴史学は他の大学でも整備が遅れていたという(Töppen, p.133)。最初は詩学の教授が兼任し、その後は実践哲学と統合されたが、実践哲学のポストの独立後、1618年に歴史学のポストも独立し、専任の教授が生まれている。

最後にラテン語についてだが、これは学則では「テレンティウスとブラウトゥス」と表現されているもので、哲学部の「予備的教育施設」としてのペダゴギウム(paedagogium)で行われた講義であろう¹⁰。これを教える教師は、少し後の1554年の学則で既にペダゴギウム教師長(Archipaedagogus)という役職になっている¹¹。教師長は同時に大学の文法学者のポストを任される(Arnoldt 1, p.25)。この役職は1619年にペダゴギウムとともに廃止される。

時代は飛んで、約2世紀後の1735年に(何度目かは不明だが)改められた講義規程に目を向け¹²、先と同様のかたちで整理してみよう。

ヘブライ語、専任	修辞学(消滅)	論理学・形而上学、専任(拡張)
ギリシア語、専任	雄弁術、歴史学を兼任	数学、専任
ラテン語(消滅)	詩学、専任	自然学、専任
	歴史学、兼任	道徳学・自然法論、専任(拡張)

ラテン語については既に述べた通りで、とうに廃止されている。修辞学については員外教授による公講義も含めて記載が見られないが、1701年の時点で歴史学と統合され、さらにその歴史学ともども雄弁術と統合されたようである(Arnoldt 2, pp.398f., 410)。弁証術の教授は論理学・形而上学の教授になっており、後で見るとここには実質的な変化がある。しかし、開学以来の変化としてはさしあたり、17世紀に入ってから実践哲学専任のポストが定着した点と、18世紀に入る頃まで修辞学・雄弁術が少なからず後退したという点を挙げておくべきだろう。あるいはむしろ、2世紀に近いタイムスパンがあるにせよ、驚くほど変化がないと言うべきかもしれない。

10 Arnoldt 1, Beylagen, p.127 [Bilage N.46]; cf. 別府昭郎『ドイツにおける大学教授の誕生』創文社, 1998年, pp.124, 261-267.

11 Arnoldt 1, Beylagen, p.175f. [Beilage N.49].

12 Arnoldt 1, Beylagen, pp.314ff. [Beilage N.54].

3. アリストテレス主義とラムス主義との関係

カントは1770年に論理学・形而上学の教授に就任しているが、これはもともと弁証術(dialectica)のポストだった。その初代から数えれば、カントは19代目の正教授ということになる。ポストの名称が変わった時期は誰も特定していない。いずれにしても、弁証術とは内容的には論理学であり、弁証術の教授とは論理学の教授であって、形而上学の教授ではない¹³。ルターが当初、排除しようとしていたアリストテレスの著作あるいは学問分野の中で、その後の公講義にまったく出てこないのは、実は形而上学だけである。メランヒトンの教育改革に続く1530年から1590年までの時期に、ヴィッテンベルク以外でも、バーゼル、フランクフルト、ライプツィヒ、ロストック、テュービンゲンといったプロテスタント諸大学で形而上学がカリキュラムから削られたり、軽視されたりする傾向にあったことも指摘されている(Sgarbi 2010, p.147)。アリストテレスの『形而上学』は読まれなくなり、形而上学そのものも下火になってしまう。

16世紀ドイツのアリストテレス主義者たちを大いに悩ませたのはフランスのピエール・ド・ラ・ラメー、ペトルス・ラムス(1515-1572年)である。ラムス主義はプロテスタントの諸大学で形而上学が復興するための触媒の役割を果たしたと評される¹⁴。ラムス主義はドイツでは1550年代半ばにまずドイツ北西部に普及を見る(Hotson, p.27)。ラムスはユグノーとしてパリを追われ、1569年から翌年にかけてドイツ南西部やスイス(バーゼル)を訪れるが(Ong, p.38)、テュービンゲン大学のアリストテレス主義者ヤコブ・シェック(シェキウス)¹⁵は既にラムス批判を始めており、ラムスの大学訪問すら撥ねつけている(Hotson, p.22)。1570年に出版されたこの批判は、ドイツでの最初の目立ったラムス批判であり、アリストテレスが『分析論後書』第1巻第4章で区別する「すべてについて κατά παντός」、「自体的に καθ' αὐτό」、「普遍的に καθόλου」のそれぞれに対応する三つの法則を提示するラムスのアリストテレス解釈を斥けている。

ラムスが1572年、サン・バルテルミの虐殺の犠牲者として世を去った後、ドイツは「ラムス主義の温床」となり(Ong, p.298)、弁証術と修辞学の刷新による教育の改革が促される。Ongがラムス主義の主要な著作としてラムス『弁証術』とタロン『修辞学』を選び、その改作も含めて各国でどれだけ版を重ねたかを集計したところによれば、ドイツでの版数は1581-1590年、1591-1600年の期間にピークに達する(Ong, p.296)。イギリスのラムス主義は従来、盛んに研究されてきたが、ラムス没後の60年ほどで見れば、ドイツでの版数は同時期のイギリスと比べて9倍もの数にのぼる(Hotson, p.4)。形而上学批判を含むラムス主義は特に改革派の中で独自の発展を遂げ、ゴクレンウス、ティンプラー、ケッカーマン、アルステットといった折衷的なラムス主義者、セミ・

13 修辞学との関係には立ち入らない。修辞学のポストは別にある。

14 Leinsle, Ulrich Gottfried, *Das Ding und die Methode. Methodische Kontitution und Gegenstand der frühen protestantischen Metaphysik*, Augsburg, 1985, p.98.

15 シェックについては以下を参照。楠川幸子「近世スコラと宗教改革——ルター主義者とアリストテレス哲学」、神崎・熊野・鈴木編『西洋哲学史III』講談社, 2012年, pp.99-146所収; ヒロ・ヒライ「靈魂はどこからくるのか? 西欧ルネサンスにおける医学論争」、ヒライ・小澤編『知のミクロコスモス』中央公論新社, 2014年, pp.280-304所収; 坂本邦暢「聖と俗のあいだのアリストテレス——スコラ学、文芸復興、宗教改革」、『Núξ=ニクス』4 (2017), pp.82-96所収。

ラミストを生みだす。セミ・ラミストたちはラムスとアリストテレスその他から方法論的な諸原理を取り出し、それを適用した百科全書を実際に編纂してもみせたが、まずもってラムスの基本的な前提や目的、諸原理に従っている(Hotson, p.135)。

地理的には北東に離れたケーニヒスベルクでも、学生が他の大学に学びに行くことは多く、法学部教授にはパリでラムスに一年ほど学んだロープヴァッサーという人物もいた(Arnoldt 2, p.251; cf.p.240f.)。しかし、ラムス主義はケーニヒスベルクに入り込むことができなかった。ケーニヒスベルクの哲学者たちはアリストテレスとメランヒトンばかりを重視し、アリストテレスを激しく批判するラムスには見向きもしなかったという¹⁶。それでも17世紀に入ると遅まきの対決が始まる。6代目の弁証術正教授フォン・ゲルダーン(在任1595-1620年)はその先陣を切り、1608年の討論で熱を込めてラムスを批判している。ラムスの論理学には利点もあるが、アリストテレスに難癖をつけるのは許しがたい、と(Pisanski, p.316f.)。

4. ザバレラがアリストテレス主義に与えたインパクト

イタリア(パドヴァ)のザバレラは傑出したアリストテレス主義者として知られる¹⁷。歴史的な影響力からすれば、アリストテレス主義者として高く評価される数多の哲学者の中でも屈指の人物である。大きな仕事としては心理学(アリストテレスの『靈魂論』やボンポナッツィに連なる靈魂論としての)と論理学(アリストテレスの「オルガノン」中、特に『分析論後書』の学問論を含む)が特筆される。論理学の著作の一つ『論理学著作集』(*Opera logica*)は1578年にヴェネツィアで出版され、その後も版を重ねていく。

おそらくはこの『論理学著作集』初版に依拠して書かれた論理学の教科書が、早くも1581年にノイシュタット(ヴァインシュトラーセ)で出版される¹⁸。1594年になると『論理学著作集』はバーゼルで、シュトラスブルク(ストラスブール)大学の医学・哲学教授ハーヴェンロイターによる序文を付して出版され、ドイツでの普及が進む¹⁹。Lohrはこのバーゼル版をもって「ドイツ哲学の新しい時代が始まった」と、その画期的な意義を高く評価している(Lohr, p.622)。ドイツではその後、なんと18世紀半ばまで、アリストテレス主義者のあいだでザバレラ・ブームが続くという(Pozzo 2004, p.176)。

ザバレラがドイツや北欧諸国に与えた影響は、大学図書館におけるザバレラの著作の所蔵状況から調査されてもいる。パドヴァのアリストテレス主義がドイツに与えた影響の大きさの指標として、印刷物を残した17世紀半ばまでのパドヴァの哲学教師からボンポナッツィなど14人を選んで行われたドイツ各地(ケーニヒスベルクは含まれない)の図書館の蔵書目録調査では『論理学著

16 Pisanski, p.158. ラムス主義に関するOngやHotsonの研究では、ケーニヒスベルクはほとんど触れられていない。

17 例えば論理学史のRisseはザバレラを「イタリアのアリストテレス主義者の中で最も重要で、疑いなくパドヴァ大学の頂点」と評している(Risse, p.278)。

18 Kusakawa, Sachiko, “Mediations of Zabarella in Northern Europe: The Preface of Johann Ludwig Hawenreuter”, pp.208-212, in: Piaia, pp.199-213.

19 Kusakawa, *op. cit.*, *passim*.

作集』が41部確認されており、この数は同じザバレラの『自然学』が同じく41部で、これを上回るのは、F・ピッコロミーニの『道徳の普遍哲学』の51部だけである²⁰。ザバレラの著作は累計175部が確認されている²¹。

アルトドルフ大学のアリストテレス主義者フィリップ・シェルプは、ドイツにはびこるラムス主義に、ザバレラを武器に戦いを挑む最初の人物となる(1590年)²²。論理学が形而上学にとって代わるというラムスの主張を一蹴し、論理学は知識のための道具にすぎず、知識そのものではないと説く。形而上学は実在的な学問(scientia)であって、トピカがそうであるような一般的な技術(ars)ではない。弁証術は対象についての一次思念を扱うものではなく、一次思念についての思念としての二次思念を扱う、等々。シェルプのこうしたラムス主義批判は、ザバレラに大きく依拠している²³。

先述のセミ・ラミストの一人、ケッカーマンは、若い頃からラムス主義になじみ、アリストテレスを軽蔑していたが、ヴィッテンベルク大学でアリストテレスの「オルガノン」を学び、アリストテレス主義に転向している。この転向はザバレラの魅力に負うところが大きく、ザバレラを駆使するシェルプのラムス主義批判もケッカーマンに強い印象を与えたようである。ケッカーマンにとってのみならず、ザバレラは、ラムス主義に代わるアリストテレス主義的な代案の可能性を感じさせていたのである(Hotson, pp.137f., 139)。

ケーニヒスベルクでもザバレラがよく読まれたことは、例えば7代目の論理学正教授となるゲオルク・クルージュス(在任1621-1625年)の著作(1618年、後述)や9代目の論理学正教授となるヴェーガー(在任1626-1629年)の著作(1628年、1630年)、私講師時代のカロフの著作(1633年、後述)からも確かめることができ(Sgarbi 2016, p.226f., n.19)、後には、11代目の論理学・形而上学教授ツァイドラー(在任1658-1663年)が、ザバレラを取り入れた1675年の著作でアリストテレス主義者として名を馳せている(Pozzo 2008, p.179; Sgarbi 2016, p.8)。

5. スアレスとアリストテレス主義における形而上学の再興

ザバレラを得たアリストテレス主義とラムス主義との戦いも冷めやらぬうちに、形而上学の復興を迫るようにスアレスが現れる。カトリックの内部では、魂の不死性をめぐるポンポナツィとの論争を経て、形而上学の必要性も認識されるようになっていた(Lohr, pp.602-605, 616f.)。

20 F・ピッコロミーニは教授の秩序(知識を教授するときまず何を最初に教え、何をその後に教えるべきか)をめぐってザバレラと争ったことでも知られており、『道徳の普遍的哲学』はこのザバレラ(『論理学著作集』第4巻)批判が展開された著作でもある。

21 ラムスに先立つ弁証論のニフォ(247部)と、ガリレオ・ガリレイと交友があり特に自然学の著作が読まれたフォルトゥニオ・リケティ(246部)の二人はザバレラを上回っている。Kuhn, Heinrich C., "Chartaceous Presence, Material Impact: Works by Paduan Aristotelians in German Libraries (A Bibliometric Study)", in: Piaia, pp.83-122.

22 Pozzo, Riccardo, *Adversus Ramistas. Kontroversen über die Natur der Logik am Ende der Renaissance*, Basel, 2012, p.46.

23 Facca, Danilo, *Early Modern Aristotelianism and the Making of Philosophical Disciplines: Metaphysics, Ethics and Politics*, London et al., chap.2.

スアレスはアリストテレスの著作の構成に即した論述を離れて、形而上学を新たに体系的に組み上げており、形而上学は実在的存在であるかぎりの存在(ens in quantum ens reale)を対象とする学問として、神学からの自立性をも獲得する。スアレスがイエズス会士であるにもかかわらず、その影響はすみやかに教派の壁を超えていく。

スアレスの影響は17世紀に入るとすぐドイツにも現われるが、それよりわずかに早く、ドイツでも形而上学が復興の兆しを見せている。まずはバーゼル大学の医学部教授タウレルスが1573年に『哲学の凱旋、即ち、哲学のための形而上学的方法』(*Philosophiae triumphus, hoc est metaphysica philosophandi methodus*)を出版し、これは「形而上学」という言葉が題に入ったプロテスタントの最初の本だと言われている(Wundt, p.54)。次いで1594年にはヴィッテンベルク大学のダニエル・クラーマーが、おそらく講義に基づいてドイツ初の形而上学の教科書を公刊し、その2年後にはタウレルスも教科書を出版している(Lohr, pp.624, 626f.)。さらには、先述のシェルプに始まり、ザバレラを範にアリストテレス主義の立て直しを図るアルトドルフ学派が同地に形成される²⁴。スアレスからの影響は、ヘルムシュテット大学のコルネリウス・マルティーニやその学生だったヴィッテンベルク大学のヤコブ・マルティーニの著作にも認められうるが、影響が最も明らかなのはギーセンの論理学・形而上学教授シャイブラー(「ドイツのスアレス」とも呼ばれる)の著作(1617年、1618年)だという²⁵。

1590年代はドイツで形而上学の復興が始まる時期だが、同時にラムス主義との対立が新たな局面を迎える時期ともなる。早い段階では、ラムス主義とアリストテレス主義、さらに(その中間の)メランヒトン主義との対立は、人文主義的な教育改革の指針をめぐる争いであった。しかし、この段階に至って争点は形而上学の可否の問題に移っていく。ラムス主義とそれまでのドイツの教師たちは、形而上学軽視という点では軌を一にしていたが、今やラムス主義は形而上学の復興を阻む壁となる。前述のC・マルティーニはスアレスとザバレラを総合することでこの壁を打ち破ろうといち早く試みている²⁶。

ケーニヒスベルク大学に対するスアレスの影響は、これまでほとんど研究されてこなかったが、Sgarbiによれば、影響は17世紀前半にケーニヒスベルクで出版された形而上学的著作にも認められ、7代目のクルージュスや神学部のカロフといったこの時期の重要な哲学者も、特に哲学の定義、主題(subiectum)、目的という、アリストテレス主義の形而上学では定番の議題においてスアレスに大きく依拠している²⁷。

24 カントはこのアルトドルフ学派のアリストテレス主義者の一人、ミヒャエル・ピッカートの著書名をメモにかきつけている(KGS 17:438f. [Ref.4160])。

25 Lohr, p.629; cf. Pozzo, Riccardo, "Logic and Metaphysics in German Philosophy from Melanchthon to Hegel", pp.63-65, in: W. Sweet (ed.), *Approaches to Metaphysics*, New York et al., 2004, pp.61-74.

26 Pozzoによれば、スアレスとザバレラというこの組み合わせは、カントまでのドイツの哲学者すべてに影響を及ぼしている(Pozzo 2004, p.184; cf. Sgarbi 2010, p.159)。

27 Sgarbi 2010, pp.145-147. Sgarbiは、スアレスに比べれば同じイエズス会士ペレリウスからの影響は外面的なものだと評するが、一般形而上学と特殊形而上学の区分については、クルージュスやカロフがペレリウスに従っていることを認めている(*op. cit.*, p.153f., esp. n.34)。ペレリウスがプロテスタントのあいだに広めたこの区分については、次の文献が必見である。Vollrath, Ernst, "Die Gliederung der Metaphysik in eine Metaphysica generalis und eine Metaphysica specialis", in: *Zeitschrift für philosophische Forschung*, 16 (1962), pp.258-284. Vollrathの論文がおもしろいのは、この区分が、カント研究者のあいだ

6. アリストテレス主義と形而上学に先立つ学問

今日から振り返るとき、17世紀の表舞台においてデカルトが果たした役割は大きく見える。懐疑論の只中でアルキメデスの点を求め、認識の第一原理の探求を形而上学の課題に据える。しかし、それと同時代的な現象と言うべきか、ザバレラを「アリストテレスとアウエロエスにしか劣らぬ論理学者」²⁸と讃えるアリストテレス主義者ゲオルク・グトケは、デカルトに先んじて知性認識論(Intelligentia)と称する一種の認識論を提唱する(Wundt, p.113f.)。知性認識論は第一原理の学問(厳密には habitus acquisitus)として形而上学に先行する。この独自の認識論は、Wundtが強調したように、デカルトとは独立に生まれている(Wundt, p.228)。

認識論では改革派がルター派に先行していた。改革派ではティンブラーが1606年、形而上学に先行する技術論(Technologia)という部門を提唱し、これに次いでアルステットも1612年、形而上学に先行する四つの部門を提起している。これらを受けたルター派内部での認識論の展開は、1615年のヴィッテンベルク大学での討論でグトケが打ち出した知性認識論から始まる。グトケが知性認識(intelligentia)と呼ぶのは、知性の働き全般ではなく、もっぱら、あらゆる学問の第一原理をつかむ知性の働きである。グトケの知性認識論はフロンメの『認識論』(Gnostologia, 1631年)に受け継がれるが、これらを踏まえて、先述のカロフは認識論と知性論という二つの分野を区別する。アブラハム・カロフは1626年からケーニヒスベルク大学とロストック大学でかわるがわる学び、教え、後にヴィッテンベルク大学の第一神学教授となる人物であり、「17世紀のケーニヒスベルクでおそらく最も重要な哲学者」とも評されている²⁹。

カロフは1633年に、知られ得るものとしての知られ得るもの(scibile qua scibile)を考察する『認識論』、1636年には『神的形式形而上学』(Metaphysica divina)を出版している。さらに、この二つに、認識の第一原理を考察する「知性論」(Noologia)その他をあわせた『哲学著作集』(Scripta philosophica, 1650年)を出版することで、認識論(Gnostologia)と知性論(Noologia)を、形而上学をはじめとする諸学問との体系的な連関のうちに置き入れている。認識論と知性論は、「諸学問の女王」としての形而上学の二人の「助手」と規定され、まずは認識論、次に知性論、その後形而上学が位置づけられる。

カロフとの関係ははっきりしないながらも、カロフがまだケーニヒスベルクの学生の頃、9代目のヴェーガーはこの系譜の認識論を同地に持ち込んでおり(1630年)、さらに、カロフと前後して、10代目の論理学・形而上学正教授アイフラー(在任1630-1657年)が同じ系譜の認識論に長く取り組んでいる。11代目のツァイドラーは逆に、知性論を批判する討論(1662年)を指導している³⁰。カロフの『哲学著作集』は比較的読まれ、少なくとも1670年までは、この系譜に連なる認識

でよく知られている同名の区分とは別物だという点である。

28 “Logicus solo Aristotele, & Averroë minor Jacobus Zabarella”. Gutke, Georg, *Habitus primorum principiorum, seu Intelligentia...*, Berlin, 1625, p.R2 r [Appendix posterior..., axioma octavum].

29 Pozzo 2008, p.174. ルター正統派の神学者として、カロフはシンクレティズム論争(1640-1686年)などの神学論争にも身を投じていく。後述するドライバーやツァイドラーはシンクレティズム論争でゲオルク・カリクストゥスの支持にまわり、カロフと対立する人物たちである(*op. cit.*, pp.174-178)。

30 Zeidler, Michael (praes.), Witzelius, Casparus, *Discursus philosophicus de Noologia, An peculiaris*

論的著作の出版が続いている³¹。

なお、デカルトはラムスに似て、同地では支持者を得られなかったようである。ツァイドラーも、感覚を疑うデカルトの議論のうちには、認識の确实性を廃棄する懐疑論しか見出さない(1676年)³²。アリストテレス主義者として特に名高く、『ケーニヒスベルク論理学』(*Dialectica Regiomontana...*)のトピカ論でも知られた神学教授ドライアー(第一神学教授在任1657-1688年)は、1680年のこの著作にデカルトのコギト批判を付している³³。デカルト評価は18世紀にはもう少し高まるようである(Pisanski, p.524)。

7. 18世紀初頭のケーニヒスベルク大学へ

18世紀については簡便に済ませたい。古くは Tonelli が、最近では Kuehn や Sgarbi が既に比較的詳細な描写を与えている³⁴。

13代目の論理学・形而上学教授ヘディオ(在任1667-1703年)は11代目ツァイドラーの学生だったアリストテレス主義者である。それに続く14代目のラーベ(在任1703-1713年)もアリストテレス主義者で、1708年の『学問的方法論』(*Methodologia scientifica*)では、やはりアリストテレスをデカルトから擁護している。ラーベが書いた『哲学教程』(*Cursus philosophicus*)は弁証論、分析論、政治学(倫理学を含む)、自然学、形而上学(最後の章が神学)を一書にまとめたアリストテレス哲学の総合的な著作であり、ケーニヒスベルク大学では、カントの学生時代にも、この教科書を使った講義が開講されていたようである(Sgarbi 2016, p.228f., n.31)。

Schmitt によれば、「アリストテレスが大学教育の主要な権威であることをやめたのは、ようやく1675年になってからである」³⁵。アリストテレス主義の凋落が語られる時期としては、これは通俗的に言われるよりも遅めの時期だと言ってよいだろう。しかしケーニヒスベルク大学では、アリストテレス主義に衰えは見えない。それどころか1700年前後の時期は、ヘディオやラーベ、さらに実践哲学教授テーゲン(在任1703-1713年)その他が、高名だったドライアーを追うかのよ

aliqua & distincta sit scientia?, Königsberg, 1662. ツァイドラー自身が実質的な著者と見るべきか。論敵の名前を挙げることは避けられているが、少なくともグトケとカロフは念頭に置かれており、形而上学に先立つ学問としてのNoologiaが斥けられている。

31 これらの著作はバウムガルテン兄弟の蔵書中にも見出され、A・G・バウムガルテンの『一般哲学』ではGnostologia, Noologia, Technologiaが形而上学の中の存在論の内部に位置づけられている(Baumgarten, Alexander, *Philosophia generalis*, Halle, 1770, p.65)。

32 Pisanski, p.318. ただし医学部では部分的な受容も見られる(*op. cit.*, p.318)。

33 Pisanski, pp.288, 293, 298; Risse, p.305f.

34 Tonelli, Giorgio, "Conditions in Königsberg and the Making of Kant's Philosophy", in: A. J. Bucher, H. Drüe, T. M. Seebohm (eds.), *Bewußt sein: Gerhard Funke zu eigen*, Bonn, 1975; Kuehn, Manfred, *Kant. Biography*, Cambridge *et al.*, pp.66-86 (邦訳: M・キューン『カント伝』春風堂, 2017年, pp.148-181); Sgarbi 2016, pp.6-16.

35 C・シュミット, 項目「アリストテレス」, p.13 r, J・R・ヘイル編『イタリア・ルネサンス事典』東信堂, 2003年, pp.12-14所収; cf. Schmitt, Charles B., *Aristotle and the Renaissance*, Cambridge & London, 1983, p.107f.

うに同じ道を歩み、アリストテレス主義が活況すら呈している。Pisanski 曰く、「このように皆が熱心に、力を振り絞って行ったペリパトス派哲学の解明によって、ケーニヒスベルク大学は外で非常に有名になり、この点ではアルトドルフ大学とヘルムシュテット大学、つまりは当時同じように評判の良かった二大学に匹敵するばかりか、これらを上回る、という具合であった」(Pisanski, p.288f.)。これならば、ケーニヒスベルクのアリストテレス主義者たちが敬虔主義、次いでヴォルフ主義といった新勢力の進出を、なおしばし防ぎ得たというのも無理はない。

おわりに

弁証術(論理学)のポストはいつ、論理学・形而上学のポストに変更されたのだろうか。この変更ないし拡充は明らかに、ケーニヒスベルク大学における形而上学の復興を反映するものであり、そうであるなら、7代目のクルージュウスがいち早くスアレスの形而上学を討論で取り上げた1618年よりは後ということになるだろうか。クルージュウスについては著作を確認できず、他の資料も乏しいが、8代目のポウケニウス(在任1626年のみ)の経歴は目を引く。Arnoldt がつくったこのポストの教授リストでは、ポウケニウスのところではじめて「論理学と形而上学の職務」という表現が用いられており(Arnoldt 2, p.382)、おそらくこれには意味がある。ポウケニウスは1621年から、論理学の正教授になる1626年までのあいだ、哲学部で形而上学の員外教授を務めており、正教授になると論理学の公講義も始めている。ポウケニウス以前の哲学部の員外教授については雄弁術の一人を除いて記録がなく、ポウケニウス以前から形而上学の公講義が開かれていた可能性はあり、クルージュウスが公講義を開いていた可能性もある。しかし、遅くとも1621年からは形而上学が公講義として、大学によって開講されていたわけである。ここには同地における形而上学の復興を見てとることができる。

ポウケニウスは論理学と形而上学の公講義を開いていた正教授であり、その意味では論理学・形而上学の正教授だったと言ってかまわない。しかし、次の9代目ヴェーガーの著作(1627年)や遺著(1630年)を見ると、その肩書きは論理学の教授のままである。10代目のアイフラーも、追悼文(1657年)には論理学・形而上学の教授と明記されるが、著作には論理学の教授としか記されない³⁶。11代目以降については多くの場合、論理学・形而上学の教授という肩書きを確認できる。論理学の正教授が形而上学も教えるという規程が遅くまで確立されなかったというよりは、おそらく、確立された後も論理学の教授という肩書きが使われ続けたのであろう³⁷。いずれにしても、

36 *Honor exequialis, viro spectabili, excellentissimo, atque clarissimo, domino M. Michaeli Eiflero, logicae ac metaphysicae p.p.*, Königsberg, 1657.

37 形而上学の導入に関するシュトラスブルク大学の経緯は参考になる。ザバレラの普及に貢献した同大学のハーヴェンロイターはもともと医学・論理学の教授(ダブル・ポスト)であったが、大学の求めに応じて、1589年から同大学初の形而上学公講義を開いている。その後、1604年に改訂された同大学の規程(ドイツ語)では、弁証術の教授が形而上学も教えるように定められている。Schindling, Anton, *Humanistische Hochschule und freie Reichsstadt: Gymnasium und Akademie in Strassburg 1538-1621*, Wiesbaden, 1977, pp.237-241. さらに1605年、ハーヴェンロイターから形而上学の講義を引き継いだダニエル・リクシンガーの肩書きには(1614年以降の著作しか確認できないが)、「形而上学・論理学の教授」という(前任者は用いなかった)表現も見られるようになる。Rixinger, Daniel, *Quaestiones aliquot metaphysicae de*

ポウケニウスの経歴からもケーニヒスベルクにおける形而上学の復興が確かめられた以上、この点の追究はもはや急務ではあるまい。

causis, Strasbourg, 1614.ケーニヒスベルクでも、どの時点かで同様のことが起きたはずである。

文献表

繰り返し参照する文献の中で、他に紛れやすいものだけをここにまとめておく。引用に際しては冒頭の略号を用いるか、著者の姓をもって略号に代える。

Arnoldt 1: Arnoldt, Daniel Heinrich, *Ausführliche und mit Urkunden versehene Historie der Königsbergischen Universität*, 2 vols., Königsberg, 1746, vol.1.

Arnoldt 2: *op. cit.*, vol.2.

Hotson, Howard, *Commonplace Learning. Ramism and its German Ramifications, 1543-1630*, New York et al., 2007.

Lohr, Charles H., "Metaphysics", in: C. B. Schmitt, Q. Skinner, E. Kessler, J. Kraye (eds.), *The Cambridge History of Renaissance Philosophy*, Cambridge, 1988, pp.537-638.

Ong, Walter J., *Ramus. Method, and the Decay of Dialogue*, Cambridge & London, 1958.

Piaia, Gregorio (ed.), *La Presenza Padovano nella Filosofia della Prima Modernità*, Roma & Padova, 2002.

Pisanski, Philippi, *Entwurf der preußischen Litterärsgeschichte in vier Bücher*, Königsberg, 1886.

Pozzo 2004: Pozzo, Riccardo, "Kant on the Five Intellectual Virtues", in: R. Pozzo (ed.), *The Impact of Aristotelianism on Modern Philosophy*, Washington, D. C., 2004.

Pozzo 2008: Pozzo, Riccardo, "Aristotelismus und Eklektik in Königsberg", in: H. Marti & M. Komorowski (eds.), *Die Universität Königsberg in der Frühen Neuzeit*, Köln, Weimar, Wien, 2008, pp.172-185.

Risse, Wilhelm, *Die Logik der Neuzeit*, 2 vols., Stuttgart-Bad Canstatt, 1964, vol.1.

Sgarbi 2010: Sgarbi, Marco, "At the Origine of the Connexion between Logic and Ontology. The Impact of Suárez's Metaphysics in Königsberg", in: *Anales Valentinus*, año XXXVI, 2010, núm.71, pp.145-159.

Sgarbi 2016: Sgarbi, Marco, *Kant and Aristotle. Epistemology, Logic, and Method*, New York, 2016.

Töppen, Max, *Die Gründung der Universität zu Königsberg und das Leben ihres ersten Rectors Georg Sabinius*, Königsberg, 1844.

Wundt, Max, *Die deutsche Schulmetaphysik des 17. Jahrhunderts*, Tübingen, 1939.